

特集

病院空間とまちづくり

本号の特集では、「空間」という視点からこれからの病院のあり方を探ってみたい。空間という場合、それには2つの側面がある。1つは病院内部の空間であり、もう1つは病院を取り巻く空間、すなわち地域コミュニティや「まち」の全体である。

大きな時代の潮流を確認してみよう。疾病構造の変化や高齢化の中で、病院は単なる治療の場ではなく、それ自体が癒しの効果をもった空間であることが求められるようになっていく。患者のストレスを増幅させるような病院の内部空間では、特に慢性疾患の場合、かえって病気の悪化を招くということさえありうるだろう。

他方、病院を取り巻く空間との関連で見れば、病院は本来、地域やコミュニティから孤立した存在ではなく、もともとヨーロッパやアメリカの病院が「コミュニティ・ホスピタル」としての起源を持つように、地域に根ざした性格を持つものである。とりわけ現在の日本のように、地域社会の再生ということが大きな課題となっている状況においては、様々な世代の人々が集い、コミュニケーションを行う場所あるいは「コミュニティの中心」の1つとして、病院は重要な役割を担うようになっていく。さらに、現在「コンパクトシティ」など歩いて過ごせる街づくりや地域活性化、中心市街地再編等の試みが大きく進む中で、まちづくりやコミュニティ空間全体の中での病院のあり方を考えていくべき時代になっている。

本特集では以上のような時代の流れを踏まえ、具体的な事例にもふれながら、多様な観点から今後の病院空間やまちづくりとの関わりについて展望してみたい。また、こうした新たなトレンドへの対応は、病院経営あるいは患者・一般市民にとって魅力ある病院づくりという意味でも意義をもつと思われる。

広井 良典

千葉大学法経学部教授